

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

山脇 望美

論 文 題 目

自閉スペクトラム症傾向の特徴を有する人々における攻撃行動の喚起とその抑制プログラムの検討

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 河野 荘子

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井 次郎

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 清河 幸子

論文審査の結果の要旨

昨今、自閉スペクトラム症と非行・犯罪行為との関連はさまざまに議論されているものの、明確な結論が出ているわけではない。本研究は、自閉スペクトラム症の特徴を強く有する者の攻撃行動の発現メカニズムを明らかにした上で、攻撃行動の抑制を目的とした心理教育プログラムを作成し、効果検証をおこなうことを目的とした。

本論文は、5章で構成されている。

第1章では、自閉スペクトラム症と攻撃行動に関するこれまでの研究成果を概観し、本研究を進める上での課題を明確にした。また、攻撃性と攻撃行動を分け、攻撃性を顕在的・潜在的に測定することの意義と、自閉スペクトラム症と関連の深い概念としてアレキシサイミア傾向に着目する意味について論じた。

第2章(研究1)では、顕在的攻撃性と潜在的攻撃性が攻撃行動を予測するという仮説を立て、実験室実験により、大学生71名を対象に検討した。攻撃行動を従属変数とする階層的重回帰分析を実施した結果、潜在的攻撃性のみ攻撃行動を予測した。これは、挑発を受けるか受けないかとは無関係だった。

第3章(研究2)では、大学生を対象にアレキシサイミア傾向と関連する自閉スペクトラム症傾向が顕在的攻撃性および潜在的攻撃性と関連することにより攻撃行動を高めるのかについて検討した。参加者は大学生208名であった。相関分析の結果、自閉スペクトラム症傾向のすべての下位尺度は、アレキシサイミア傾向と関連があった。共分散構造分析の結果、「注意の切り替えの困難さ」と「細部への注意」は、顕在的攻撃性と関連し、攻撃行動と正の関連が示された。また、「コミュニケーションの乏しさ」は直接的に攻撃行動と正の関連がみられ、「社会的スキルの乏しさ」は、直接的に攻撃行動と負の関連がみられた。自閉スペクトラム症傾向と攻撃行動の関係を検討するには、アレキシサイミア傾向と関わる自閉スペクトラム症の特徴に着目し、攻撃行動との関連を検討する必要があることが示された。

第4章(研究3)においては、非行少年を対象として、アレキシサイミア傾向と関連する自閉スペクトラム症傾向が顕在的攻撃性および潜在的攻撃性と関連することにより攻撃行動を高めるのかについて検討した。参加者は非行少年257名であった。相関分析の結果、「コミュニケーションスキルの乏しさ」は、顕在的攻撃性を高めて攻撃行動を増大させ、「想像力の乏しさ」は、直接的に攻撃行動を増大させることが示された。ゆえに、非行少年においても、アレキシサイミア傾向と関連する自閉スペクトラム症傾向の特徴と攻撃行動との関連を検討する必要があると示唆された。

第5章(研究4)では、第3章と第4章の知見にもとづいて、非行少年を対象とした新しい感情学習プログラムの開発とその効果検証を実施した。非行少年7名に面接調査をした結果、感情面に注目することの大切さを理解することや、表面的な感情だけではなくその背景に存在する感情についても理解する重要性が示された。そこで、従来用いられていた感情学習プログラムの内容を精査し、非行少年80名を対象としてプログラムの効果について検討した。その結果、アレキシサイミア傾向の高い非行少年や自閉スペクトラム症傾向とアレキシサイミア傾向両方が高い非行少年において、プログラム実施後は、アレキシサイミア傾向の得点、攻撃性の得点が有意に低下した。感情学習プログラムは、アレキシサイミア傾向を低下させることに効果的に働くプログラムであるといえる。

論文審査の結果の要旨

第6章は、これらの研究結果を総括した上で、自閉スペクトラム症と関連するアレキシサイミア傾向の影響で、これまでの対人関係場面においてネガティブな要因が形成され、その結果、他者に対する攻撃行動が喚起されると考察した。「自閉スペクトラム症の人々は犯罪者になる可能性が高いという暗黙裡の印象」は、当然ながら誤りであり、感情学習プログラムによって、自分自身や他者の本来の意図を適切に理解することができたならば、攻撃行動の出現を減らすことが可能であると論じた。

本論文は、犯罪心理学の分野で、自閉スペクトラム症傾向をもつ者の攻撃行動発現のメカニズムを解明し、それらの知見をもとに心理教育プログラムを提案し効果を検証しただけでなく、自閉スペクトラム症傾向にもとづいたアレキシサイミア傾向が、他者を攻撃するという不適切行動を引き起こすが、その態度や行動は変容可能であることを実証的に示したという点でも、学術的意義は高く評価されるものである。

本論文に対して、審査委員は慎重に審議をおこない、内容に関して、次のような指摘がなされた。

- (1) 研究に使用した IAT の手法としての妥当性はどの程度担保されているのか。
- (2) 研究1から研究4までの知見を総合的に考察し、本研究でどのようなことがわかったのかなど、わかりやすく記載する必要がある。
- (3) 攻撃性と攻撃行動を分けて考えているが、本研究においては攻撃性をどのようなものにとらえているのか。怒り感情との関係はどのように考えているのか。

審査委員からのこれらの指摘に対し、博士学位申請者は、研究の限界や課題についても十分に認識しており、質疑に対する回答も、適切かつ妥当なものであった。また、これらの課題は、今後の研究によって対処していくことが可能であるとした。

以上の結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。

論文審査の結果の要旨